

| | | | |
|----|--------------------------|--------------|----------|
| 所属 | 言語文化研究科 日本語・日本語教育専攻 修士課程 | 修了年度 | 平成 23 年度 |
| 氏名 | 趙 崎棚 | 指導教員 (主査) | 金沢 朱美 |

| | |
|------|--------------------------------|
| 論文題目 | 松本亀次郎の『言文対照・漢訳日本文典』の一考察 |
|------|--------------------------------|

本文概要

現在中国の大学で使われている日本語教材が大体二種類に分けられる。一つは中国人の学者が編纂したもので、もう一つは日本人の学者が編纂した教科書である。中国人の学者に作られた教科書は中国の学生向けであるにもかかわらず、その教科書の内容はその著者の日本語のレベル次第である。日本人の学者に作られた日本語教科書は日本語学習者向けだと言うものの、それが世界中の日本語学習者に向けて開発された教科書で、単なる中国人に向けて編纂した教科書は少ない。松本亀次郎自身は漢文の素養が高いのみならず、日本語教材の開発能力の高さも言うまでもない。『言文対照・漢訳日本文典』は出版されてから、4年も立たずに23版を重ねたという大きな業績を遂げた。この教科書の考察を通じて、中国人の学生向けの一番相応しい教材の模様を探りたいと思う。

現在まで『言文対照・漢訳日本文典』に対し、研究を行う学者が多く、様々な成果が挙げられる。中野真樹（2010）は明治期の仮名遣い改定論を出発点として『言文対照・漢訳日本文典』の仮名遣いに対し、特に長音表記を中心として研究を行い、仮名遣いにつき、留学生たちの特徴を把握し、教材編纂に工夫する松本の用心と考え方を肯定した。また、張 金塗（1993）は『松本亀次郎の中国人に対する日本語教授法の一考察』の中で、『言文対照・漢訳日本文典』の中国人留学生の日本語教育における意義を述べていた。以上の研究結果をまとめて見れば、『言文対照・漢訳日本文典』に対する考察は現在の中国人の学生向けの日本語教育の発展に非常に有意義であると思う。

松本亀次郎は終生教育事業に従事し、宏文学院をはじめ、京師法制大学堂、東亜高等予備学校に就職して、教授、教諭及び舎監を歴任し、常に日本語教育の最前線に立ち、中国人に対する日本語教育に終生を捧げたと言える。当時、中国人の留学生に対する本格的な日本語教育が始まる萌芽期であり、中国人の留学生に向けている教科書及び教授法は一切不明である。松本はこういう情勢の中で、教科書の編纂及び教授法の研究に全力を尽くしたと思われる。

『漢訳日本文典』が出版される前に、様々な日本語文法書が使用されている。にもかかわらず、文語体と口語体の区別に対する説明、また文法に対する説明、引例及び解説は詳しくない。さらに、漢訳の付く教科書は一冊もない。松本がそれらの問題を痛感し、文法を中心として文語体を主にし、口語体が従である形式を取り入れ、中国の留学生と協力して漢訳を教科書に導入した。また、当時、世に流通していた日本語教科書の国語の教育方式と教授法を否定し、日本語を学ぶ清国の留学生たちの状況は国語読本を学ぶ日本小学児童の状況と違い、その教授法も相異していなければならないという見解を出した

『言文対照・漢訳日本文典』は松本亀次郎の留学生に対する日本語教育を始めた初期の著作であり、内容また文法は時代から受ける影響が強いと思われる。にもかかわらず、松本が常に留学生の立場に立って日本語の教授法の研究を行い、同時代の他の日本語教育者の観点を参考にして自分なりの意見も教科書の編纂に導入している。松本は一生をかけて、数多くの教科書を残したが、中国人学生に対する日本語教育にとって貴重な資料だと思う。『言文対照・漢訳日本文典』の構成、文法、用例等の考察を通じて、自分なりの見解を提出し、現在日本語を学んでいる中国人の学生に適している日本語教科書の開発の一助になれば幸いである。